

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 呉人 徳司 印

学位申請者 郝日樂（ホリロ）

論文名 モンゴル語オラド方言の文法

結論

ホリロ氏から提出された学位請求論文「モンゴル語オラド方言の文法」について、論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

なお、審査委員会は呉人を主査に、副査として本学のアジア・アフリカ言語文化研究所の山越康裕教授、本学の梅谷博之特任講師、本学の山田洋平准教授、主任指導教員である風間伸次郎教授を加えた5名で構成された。

論文の概要

本論文は、モンゴル語オラド方言の文法を主に音韻・形態の面から記述したものである。オラド前旗で話されるオラド方言を対象にした文法記述と、約2000語の語彙データ、呼称システム、2編の自然談話資料のテキストを提示している。さらにこの方言への漢語からの影響についても分析を加えている。

本論文の構成は以下のようになっている。

「序章」では、まず本論文の背景・目的・意義について述べている。次に筆者がこれまで行ったフィールド調査やオンライン調査の概要など、本論文の元となったデータを紹介し、本論文の構成ならびに表記のルールを提示している。

第1章「オラド方言の概要」ではオラド方言の基礎的な情報、すなわちオラド方言が話されている地域の地理、生業・文化、歴史を紹介した。その後、オラド方言の言語系統を略述し、話者人口、言語名、言語接触、方言内部の差異、および本論文の研究対象を示した。その後、オラド方言に関する先行研究の整理を行っている。

第2章「音韻論」では、オラド方言の音韻体系を明らかにしている。まず、各音素とその実現形を示した。そこにはモンゴル語の文語形を示し、チャハル方言やオルドス方言、および同じ音韻特徴を持つホルチン方言などとの相違についても指摘している。オラド方言の音韻的な特徴として、音素 /ə/ は語頭音節で

は [ə ~ i] として実現し、長母音 /əə/ が語頭音節に現れないことや、近隣方言にある /o/[o] がオラド方言に存在せず、この点では歴史的に関連があるホルチン方言と軌を一にしていることが示されている。次に、音節構造、アクセントの記述を行い、さらにオラド方言の母音調和の特徴を、固有語、借用語、接尾辞の各面から述べている。特に接尾辞の母音調和に関しては、一部の定動詞接尾辞 (-jAA, -lAA, -nAA) や副動詞接尾辞 -xlAAr, -sAAr、および完了、完遂形動詞接尾辞 -sAŋ や -tsAŋ に母音調和の崩れが見られることを指摘した。

第3章「記述の諸単位」では、記述に用いる単位の導入と、品詞分類、形態法の記述を行っている。品詞には「名詞」「指示詞」「形容詞」「数詞」「代名詞」「動詞」「副詞」「接続詞」「間投詞」「小辞」の10種類を認め、語形成の方法には派生、重複、複合の3つがあることを示した。

第4章「名詞類と名詞形態論」では、名詞、形容詞、数詞、代名詞の構造を述べ、名詞に接続する接辞を複数表示、格、再帰、所有の順にそれぞれ記述している。格接尾辞のうち、特に内格 -tAr がオラド方言の特徴であること、指小辞 -xAŋ が重複して用いられることや、属格形に後続する所有接尾辞 -x の任意性といった特徴を指摘している。代名詞には、人称代名詞、指示代名詞、再帰代名詞、疑問代名詞等の下位分類を認め、1人称には包括形に由来する bid- 系列がないが、除外形に由来する man- 系列を持つこと、意味的には包括と除外の区別がないことを示している。

第5章「動詞と動詞形態論」においては動詞の基本構造を示した後、動詞の屈折と派生についての記述を行っている。屈折接尾辞は定動詞（終止形と命令・願望形）、副動詞、形動詞に分けて考察し、派生接尾辞にはヴォイス、アスペクトの接尾辞を扱っている。懸念を表す命令・願望形接尾辞 -čUxUε ~ -xUε は他の方言では確認されていない要素である。非過去形動詞接尾辞 -x の文末での使用は必ず文末小辞を伴うことも指摘している。

第6章「不変化詞類」ではオラド方言の副詞、接続詞、間投詞、小辞全般について考察している。第7章「オラド方言に見られる漢語の干渉」では、オラド方言における漢語借用語の音韻的特徴と形態的特徴をまとめた。漢語借用語の音韻に関して、古い時期に借用された語は複合母音の長母音化や、母音調和が適用されるなどモンゴル語の規則に則っていること、漢語形容詞は漢語要素「地／的 -d」を伴って用いられること、漢語名詞語幹にモンゴル語の動詞派生接尾辞がそのまま接続されることが広く観察されることを論じている。オラド方言が話される地域は漢語の下位方言である晋語地域であることを指摘している。

審査の概要及び評価

上記のようにホリロ氏の博士論文は、新しい知見を多く示しつつ、モンゴル語オラド方言の音韻・文法の全体像を詳しく説明することに成功している。

本論文の内容に関して、各審査委員からさまざまな評価がなされた。各委員より特に高く評価されたのは、以下の点である。

- ・必要な点をおさえた詳しい記述であり、内的再建の資料としての価値もある点が評価できる。
- ・語彙集とグロス付きのテキストがついている点も高く評価される。
- ・従来言われてきたこの方言のモンゴル語諸方言中の位置づけに対して、再検討が必要であることを言語事実とともに提示した点が貴重である。

しかしながら本論文にも改善すべき点が残されている。最終試験において、審査委員からいくつかの質問、要望が出された。その指摘のうち、重要な点としては以下のようなものをあげることができる。

- ・用語に関して、形の面でも機能の面でも使用にゆれがある。
- ・内モンゴルの先行研究の記述の伝統的な形式を無批判に受け継いでしまっているところが見られ、その結果、記述全体のバランスが悪くなっている。
- ・共時的な問題と通時的な問題を峻別すべきである。
- ・チャハル方言としている形の中には、内モンゴルの人工的な共通語として設定したものが含まれている。
- ・付録テキスト中の語形に論文中の音韻的記述と合致しないように見えるものがある。

各委員からのこれらの指摘も、本論文の価値を高く評価した上で今後のさらなる研究の進展を期待したものであり、建設的な意見として提言を行っているものといえる。

最終試験における質疑においても、申請者の応答は的確で、委員たちとの間で学問的に興味深い議論が行われた。その過程から、申請者が指摘された問題点をよく自覚し、今後それらを解明していくのに十分な学識と強い意欲を持っていることが確認された。モンゴル語オラド方言の文法全般の記述研究の進展、さらにはオラド方言を含むモンゴル語諸方言の記述研究・対照研究・系統的な観点からの研究に関して、申請者の今後の活躍が十分に期待できる。

審査委員会は、学位請求論文の内容、ならびに最終試験（公開審査）の結果より総合的に検討した結果、全員一致で申請者ホリロ氏の学位請求論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであるという結論に達した。